

九 自分の棒で自分が叩かれる

心學の大家中澤道二と云ふ人は、堪忍を守ることにつき、非常の苦心を積まれた人である。

堪忍の成る堪忍は誰もする、ならぬ堪忍するが堪忍

という道歌を詠んで、人にも教へ、自らも之によつて堪忍の修業をしつゝあつた。或時備前の藩主池田一心齋侯が、此の事を聞いて邸内に講話を依頼されました。道二翁は約の如く、池田の邸に至り案内を乞ふと、應接の間に通されて、茶菓等の饗を受けて、「どうぞ暫くお待ち下され」との取次の詞に、二時(今の四時間)ほど待つて居た。その時取次が出て来て「どうぞ此方へ」と案内するから、今度は話をするのかと思つて行くと、又此方の間で「どうぞ暫くお待ち下され」と云ふた。また茶菓等を供せられて、據なく待つて居る。この時、道二翁は、二時も待たして置いて又此の上に待たせるとは、無禮なことであると、腹は立ちかけたが。成る堪忍は誰もする、成らぬ堪忍するが堪忍だから、是は怒つてはならぬと、凝然と堪忍して居る。徐々お腹は空いて来る。お菓子かとして、そんなに頬張る譯にはゆかず。従つて静まりかけた胸も、穩かなるを得ず。つくねんとして二時ばかり待つて居た。今の八時間も待たせられたので、日は早や西に傾いてきた。やつとのことに「こちらへ御通り下さい」との案内につれて、奥座敷に向へば、襖さつと開け、内は大酒宴の最中である。杯盤酒肴、ところせまきまでに狼藉を極め、上座に控た一心齋侯は、多くの女共にかこまれて酔眼朦朧。近習や老臣も赤ら顔の泥酔。流石の道二翁も之には驚かざるを得ぬ。咄何等の無禮ぞ。人をよいほど待たせて置いて、自分は酒を飲んで居るとは。心では思つたが、待て暫し成らぬ堪忍するが堪忍と、面を柔げる。一心齋侯から「マア一杯飲んでくれ」と

の挨拶に、「私は不調法でありますから戴きませぬ」と云へば「その飲めぬ處を飲むのが面白い、さあ飲んでくれ」。「イヤ少しも飲めませぬ」。「それなら大に飲んでくれ」。大きな杯をつきつけて家來が酒を注ぐ。注がせまいとする、注がうとする拍子に、酒が溢れて袴にかゝる。手が熱い。もう堪らない。「私は今日講釋を致しに參つたのである、然るに此の御待遇は何事である、斯る處に講釋しても何の効もない、是でお暇仕ります」と。満面怒氣を帯び、席を蹴つて起上つた途端。一齊に手を拍つて、居并んだ人々が、「堪忍のなる堪忍は誰もする、ならぬ堪忍するが堪忍」と云ひつゝ、どつと笑ひ崩れた。道二翁はハツと思ふと、其處へ手をついて、「私が腹を立てましたのは實に悪うございました。私がムラくとして立上りましたのは、ただ私の修業が足らぬのでございます、何卒私が是迄申した事と、私の行と違つて居たことを御赦し下さい」と、反省の涙に咽びました。此の人ならばと一心齊侯も痛く感心し、「サア、皆、講釋を承はれ」とあつて、次の間さつと開くれば、大廣間に立派な見臺。一同形を改めて謹聴したと云ふことである。

如何にも、ならぬ堪忍するが堪忍と、一意専心に堪忍の修業をし、堪忍の道も充分心得た筈の道二翁さへ、實際人に接し事に臨んでは、自分の棒で自分が叩かれるといふ始末になる。行ひ難いは實際の問題である。想うて茲に至る。我等はすべてに向つて、頭の上らぬ奴であると、信知せざるを得ない。何事も自分と云ふものが、頭を出さねば眞劍ではないが。さてその自分が頭を出して、自分を見究められた時、此の自分ゆる、此の私ゆるの大慈悲の御佛在すと信知せられるのであります。